

ロジカル・シンキングの極意（1）

「ロジカル・シンキング」ばやり

ここ数年、日本のビジネスパーソンの中で「ロジカル・シンキング」がちょっとした流行になっています。書店のビジネス書コーナーに行くと、ロジカル・シンキングや論理的思考のトレーニングのための書物が所狭しと並べられています。

出版業界の専門家に尋ねると、こうしたロジカル・シンキング関連の書物の売り上げは概して好調なようです。わたし自身、いわゆる「流行現象」に対しては疑り深く、まずは斜に構え、結果的には流行にくみしないことの方が多いのですが、こと、このロジカル・シンキングの流行に限っては、比較的好意的な印象で受け止めています。

問いかけの方法を変えるだけ

しかし、もののビジネス書を読んでみると、ロジカル・シンキングの必要性やその基本的な特徴については書かれていても、いったいどうすればロジカル・シンキングを身につけていくことができるかについては、あまり詳細に書かれていないようです。

以下では、すぐに実行可能なロジカル・シンキングの極意について述べてみることにしてみましよう。実は、問いかけの方法をちょっと変えてみるだけです。

思考の枠組みを変えるコツ

まず、当たり前のことですが、ロジカル・シンキングとは「論理」（ロジックス, **logics**) をもとにした思考法であることを理解する必要があります。ここで重要なのは、論理とは何か、ということです。その問いへの回答をわかりやすく一言で答えるなら、それは必ずばり「なぜ」（“**why**”）を考えてみることです。

この **why** 型質問に加え、それは「何か」を問う **what** 型質問もあわせて自分の思考様式の中に取り入れ、思考の枠組みを組み立てていくこと——これがわたしの考えるロジカル・シンキングの要諦です。

How to 型ではなく what 型と why 型の問いを考える

多くのビジネスパーソンの方は、ビジネスの日々の局面で「なぜ」を真剣に考える機会は少ないのではないのでしょうか。多くの企業では、日々こなしていかないといけない業務が山のようにあり、じっくり「なぜ？」と問うてみる暇などほとんどないと推測されるためです。そのため、多くの皆さんは「どうやったらそれがうまくできるか」つまり、**how to** 型の質問が真っ先にきてしまいがちです。

How to 型の質問は、もちろん重要です。それは、具体的な解決方法を教えてくれる質問の仕方です。（ちなみに、この小稿も「どうやったらうまくロジカル・シンキングを身につ

けられるか」という how to 型質問になっています。)しかし、この how to より先に考えなければならぬ問いが what と why なのです。

厳密に考える癖をつける “what” 型の質問

まず what 型の質問は、いま自分が考えようとしている事項や対象を厳密に規定します。例えば、とある人事マネージャー氏が「どうすれば、我が社に成果主義がうまく導入できるのだろうか?」と漠然と考えていたとしましょう。これは「どうすれば」という問いなので、how to 型の質問です。

ただ、このままではすぐに成果主義導入へ向けた妙案は思いつきません。そこで、「今いわれている成果主義とはいったい何だろう?」というように “what” を問うてみるのです。成果主義とは何かについて、漠然としたイメージや印象は誰しもがもっているのですが、この問いにきっちり正確に答えられる人はなかなか居ないはずです。

考えようとしている事項や対象が曖昧なままで思考を進めると、多くの場合、危なっかしい、あやふやな議論に陥りがちです。まず、成果主義とは何かという基本的な認識を整理し、きっちり物事を考えていくための土台を作るのが、この what 型質問の役目なのです。

自分流の明確化で OK

ここで留意しないといけない点は、逆説的ですが、必ずしも「完璧に規定する」必要はないということです。学術的に議論しようとするれば、完璧レベルでの正確さももちろん必要になるのですが、それよりも、自分がこれから考えようとするを自分なりに明確化できていること、こうであれば自分の考える成果主義だけれども、こうであればそうではない、というレベルにまで考えておけば、ひとまず十分です。

What 型質問ができあがれば、次はロジカル・シンキングの本丸 why 型質問の出番です。

株式会社インソース <http://www.insource.co.jp/>

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5階

TEL : 03-5259-0070 FAX : 03-5259-0075